



変つた幼児 (三)

— その診断と指導 —

村山貞雄

あれば入れたく思う。

二、家庭環境

父(四十三才)は、東京大学を中途退学し、現在会社員である。母(三十八才)は高等女学校を卒業している。

姉が一人と妹が一人いるが、姉は現在十才で、或る国立大学の附属小学校に在学しており、妹は四才で、幼稚園にかよつてゐる。以上の他の手伝いのおばあさん(六十五才)が一人おり、かなり良い家庭である。

昭和二十六年
五月下旬相談

六才九ヶ月

三、石井良彦 男

一、主 訴

「知能遅滞」

良彦は知能がかなり遅滞している。程度はひどいらしいが、原因はよくわからない。

今後の教育方法として、附近の幼稚園に行かせて歳下の子と遊ばしたらとも思われるが、其処にいつまでもいる

わけにもいかないであろう。そこで適当な精神薄弱児の收容施設に入れたい。普通なら大学までやるころであるから、その費用をかけてやらなければならぬと思われるが、家にも他にやることがあるから、そうも出せない。厄介ばらいをするわけではないが、他の姉妹のこともあり、そのことも考えてやらねばならず適当な保育施設が

三、生育史と家系

良彦は過産、正常産で、生れたときの重さは九百匁、母乳と人工の混合で育ち、一才四ヶ月から離乳をはじめた。二才〇ヶ月のときに肺炎をし、三才で麻疹にかゝつてゐる。

歩き始めたのは三才七、八ヶ月のときであつた。次に母親からのききとりの内容を要約して書いてみよう。

ききとりの内容
はじめて良彦が変だと気がついたのは、この子が丁度満一才の頃消化不良でみてくれた女医さんが脳が悪いと言つたときでした。専門医がそう言つたのですから、その頃すでに変なことがあらわれていたのでしよう。それでも私達はそんなことに少しも気がつきませんでした。そのことからこの子が変になつたのはそれ以前だと推測できます。良彦は生れおちてすぐひどい熱がありました。普通の渴熱より少し高く日数も長

かつたようです。そうですね、熱は四十度位でしょうか。長さは一週間位つゞいたと思います。尤も一週間の間四十度つゞいた訳ではありませんが、その間風呂に入れることができませんでした。これがこの子が変になつた原因とも思われますが、しかしこのような熱がでるところにすでに何かあつて、熱はその結果ではないでしょうか。

又よく考えてみると、良彦は皮膚がかさかさして普通の子のようにぼちやぼちやしていませんでしたが、よく太つていたので産婆も私も気がつきませんでした。

それから少し斜視でしたが、今に直るだろうと思つていました。七、八ヶ月頃になつて栄養に十分気がつけているのに標準ほど発達しないことに気がつきました。

満一年頃に先程言つた女医に診てもらつたのです。私は内心普通よりすぐれた子ができるに違いないと思

つていました。実際、姉も妹も発達將近所のお子さまよりすぐれているようです。だから女医さんがそう言つたときも、半信半疑でした。

二、三才頃はよく熱を出したり、身体をこわしたりして大変心配しました。歩けるようになった頃から健康にさほど心配しなくなりました。

そうですね。歩きはじめたのは三才七、八ヶ月頃だつたと思います。

それまでは這うことしか出来ませんでした。この頃には心身共に低いのに明かに気がついていました。その頃医者に診てもらつたところ、前に言われたよりも悪いことに気がつき、それ以後診てもらえば診てもらうごとに私達が思つてゐるよりもはるかに悪いことに、次第々々に気がついてきました。この気持ちはお察し下さい。今年からは良彦が学校に行く歳となつたので、ます／＼心配し〇〇医大の××先生に診てもらつて、グルタミン酸をのんでいま

す。ええ、この二月頃から飲みはじめたのですが、飲みはじめた頃はねずみが動きまわるように少し興奮状態が見えましたが、今はそれがしづまり別に変つたことがあります。効果はまだわかりません。

なお生れる前の原因は見当らない。又両親のいずれの家系にも変つた者は一人もないようである。

四、診 断

その一

良彦はよそのこどもをいじめたり、乱暴するというようなことはなく、ひとりひつひつしており、一人遊びが多い。忍耐力や興奮を示さず、いたずらされても泣いたり怒つたりせず、はむかおうともしなす。

その二

愛育研究所の乳幼児精神発達検査法によると、発達年令二才六ヶ月（知能差マイナス四年三ヶ月）、発達指数三十七であり、痴愚（Imbecillity）に属

する。

その原因は、遺伝、胎児中の事故、出産時の事故、成長中の疾病及び事故のいずれをしらべても明瞭にあらわれない。すなわち原因不明の精神薄弱児である。

五、指示 内容

親から全く離れた收容施設に入れることは好ましくない。特殊学校又は特殊学級に入れることが望ましく、家庭から通うのに最も便利であると思われ、收容施設とその所在地と内容について指導した。

六、経 過

良彦の母親は、これらの收容施設で断られ、結局送り迎への人をやとい、これを理由として愛育研究所の特別幼稚園に非常に熱心に入園を申し込み、六月のはじめに入園した。

特別幼稚園における保育効果は、非常に良好である。すなわち、七月に合

宿による海水浴につれて行つて以来、効果がみえてきた。

誰にたいしても初めは全然あいさつもせず、先生にたいして応答もしなかつたのが、九月下旬頃からあいさつができるようになり、表情もやわらぎ、ときどき非常ににこやかな顔をするようになった。

良彦の性格は非常に頑固なことが大きな特徴であつたが、これがとれかゝつてきた。すなわちはじめはでんと坐つて先生の手伝いをしなかつたが、十月頃から先生が頼んだとき、気が向けばするようになった。

又同じ頃から幼稚園の規則にいくらかのるようになった。

又なぐり書きであつたのが、一定の目的をもつて絵を書きはじめた。なお七月頃から名前を呼ばれて返事をするようになった。（途中又一時しなくなつたが十月になつて又するようになった。）

以上のように、特別幼稚園に入つた

結果、対人関係やその性格に保育効果
があらわれ、母親は喜んでゐるようで

ある。

四、池上正彦 男

二才八ヶ月

昭和二十六年
五月上旬相談

一、主 訴

「嫉妬心が強い」
正彦は兄が幼稚園に行くようになってから、兄にたいして強い嫉妬心と対
抗心をいだくようになった。すなわち
最初の日、母親が兄を幼稚園に送つて
行つた留守の間は非常によい子であつ
たが、母が兄をつれて帰つて来、幼稚
園の話をするると強い嫉妬を示し、それ
以来いら／＼するようになった。それ
で毎朝物を投げたり、皆に（外来者の
叔母達にさえ）当りちらして、はたか
らみても妙なほど反抗的になつた。
又妹を可愛いと言つて皆があやす
と、どこからかとんで来て、「可愛く
ないよ」と言い、可愛がつてほしそ

二、家庭環境

にみえる。

父親（三十二才）は東京大学を卒業
し、現在会社員である。母親は、ある
女子専門学校の英文科を卒業し、現在
一週間のうち四日間家をあけて仕事に
出かけるが、外に出る日は十六才の女
の子に留守を頼むことにしている。
兄と妹が一人ずつあり兄は現在四才
〇ヶ月で幼稚園に通つてゐる。この兄
より正彦の方がかしこそうで、たとえ
ば写真を見せて「誰某はどこにゐる
か」とたずねると、大体正彦の方が早
くさがす。動作も兄がおそく、正彦の
方がすばしい。

兄の俊彦は、二才十ヶ月のとき教育

三、生育史と家系

相談に来ており、発達年齢二才十一ヶ
月発達指数百三であつた。又四才〇ヶ
月のときに相談に来、発達年齢三才十
ヶ月発達指数九六であつた。（なおそ
の時非常にテストがしにくかつた）
現在父母は、就学のことでは兄の方に
夢中になつてゐる。妹は一才一ヶ月で
ある。

正彦は熟産で且つ正常産で、産れた
ときは三千八百瓦もあつた。栄養は主
として人工で育つた。

兄が十一ヶ月のとき病氣にかゝり、
発達がおくれたために、兄と同等か又
は自分の方が上だと思つていたらし
い。

なお兄の俊彦は昨年一種の神経衰弱
のようになり、弟やその他の子どもを
よくいじめ、そのやり方が辛辣でこど
もらしくなかつた。そして或る日、興
奮状態になり気が変になるのではない
かと思われたことがある。そこで教育

相談に来た結果、幼稚園にやつたらよいということ、幼稚園に行かせたら直つた。しかしいじめ方のこともらしくない辛辣な点は今でも少し残つてゐるが、お人よしのところもある。

弟の正彦もまた非常に疳癩持ちで、たとえばごはんでもちよつとこぼすとキーキーと声を出したり、靴がはけないうちにキーと言つたりする。

四、診 断

その一

愛育研究所の検査法によると、正彦の発達年令は三才六ヶ月、発達指数は百三十一である。

検査態度は後半になつてからポツポツしやべりはじめたが、全体的に無口である。

なお二才五ヶ月の時に（検査日昭和二十六年五月）同じ検査法で検査したところ、発達年令は二才一・五ヶ月で発達指数は八十八であつた。（ただしそのときもテストにのりにくく、テスト

の備考によると幼稚園の歌声や周囲のものに眼がうつつてやろうとしないため、実際よりは低く出たのではないかと思われると書いてある。）

その二

正彦が俊彦にたいして嫉妬をしいしめた理由は、今まで自分より下ぐらゐに思つていた兄が、母と幼稚園に行き、帰宅後そのことを話したためである。知能年齢は、兄が（知能指数百とみて）四才〇ヶ月、正彦が三才六ヶ月で、現在約六ヶ月位の差が考えられるが、写真の中の人物でも自分の方が早く見つけたりするので、兄にたいして優越感を持つていたために、不安定な状態になつたと考えられる。

正彦は元來感情的でヒステリックな性質を持つており、十分に嫉妬深い状態になれる素因を有していたところ、皆が、自分よりも兄の方を構ひ、又妹を可愛がるという気持を強く抱くようになつたので、衝動的な性格（疳癩持ちその他でわかる）の彼が当然嫉妬を

強くあらわすに至つたのであろう。

なお昨年兄が神経衰弱気味になり幼稚園に入れると直つてゐるが、正彦も単に嫉妬するというこの他に、幼稚園に行きたい状態に現在なつており、その一つとして嫉妬があらわれていると考えられる。

五、指示の内容

正彦を九月からでも保育所に入所させるのがよい。保育所の都合でそれができなければ来学年から兄の行つてゐる幼稚園に入園させることが必要である。

兄も昨年情緒が非常に不安定になつたのを幼稚園に入れて直つており、正彦の場合はこの情緒の動揺が嫉妬のあたりで多くあらわれてきているから、あらゆる意味で、幼稚園（やむを得なければ保育所）に入れることが望ましい。

保育所に入れることができないう場合は、年齢が小さいのだから来年になつ

たら幼稚園に行けるのだということ
を納得させる一方、幼稚園に行くこと
が、さほど特権でないと考えるように
導き、特に兄が幼稚園に行きだしたか
ら母親が兄を重視しているという考え
をいだけせないように、気をつけなけ
ればならない。

正彦が嫉妬をおこす原因は家庭にも
一半の罪がみられる。すなわち兄を弟
より構いすぎたり、妹を可愛がるなど
のことがみられているが、それでなく
ても男―男―女という同胞関係の場合
に、二番目の男の子が嫉妬をおこすよ
うな親の取り扱いをうけやすい傾向が
あるから特に注意を要する。

なお正彦の心が非常に狭く又神経質
であるから、徐々に心が広くおうらか
になるように努力しなければならな
い。たとえは、いなかにつれて行つた
り、ハイキングと一緒にへ行つたりし
て、おうらかな大自然にふれさせるの
もよい方法である。

又両親も修養して神経質な態度をと

らないようにし、こどもにたいしても
感情的な取り扱いや偏愛のある取り扱
いを避けなければならぬ。

六、經 過

六ヶ月後に、母親よりきいたことを
要約すれば、次のごとくである。

私は正彦を兄と同じ幼稚園に入れ
ようとしたが、この幼稚園は元
来二年保育制をとっており、兄が特
別のはからいで入園させてもらつて
いたもので、その弟もという訳には
いかないと言つて断られました。又
保育所を探しましたが、適当なもの
が見当りませんでした。

そこで、正彦が兄より小さいとい
うことを理解させようとし、「正ち
やんは小さいのだから、お歳をとつ
たら行けるのだよ」とか、「正ちや
んは二つで、お兄ちゃんは四つだか
ら」というように言つてきかせまし
た。すると正彦は非常に真剣になつ
て、「絶対にそんなことはない」と主

張しましたが、その真剣さに異常な
ものが見られ、私を説き伏せなければ
やまないという調子さえうかがわ
れました。そして結局この努力は失
敗に終わりました。(今までもおもちや
その他を全く平等に与えていまし
た。)

そこで私は兄だけが幼稚園に行く
理由をいくら説明しても駄目である
と考えましたので、今度は正彦が幼
稚園を軽視するように努力しまし
た。

すなわち、今まで弁当のないひま
な日は、幼稚園についていたのを、送
り迎えだけにして送つて行つても直
ぐに帰つて来、積木や切り紙をして
でるだけ正彦と遊んでやるようにし
ました。そして、「お兄ちゃんは幼
稚園に一人で行つているので可愛そ
うね」と言つたり、食事のときなど
には、「正ちやんはお母さんと一緒
にごはんを食べれていいね。その代
りお兄ちゃんが帰つたら、なかよく

してあげましようね」と言うなど、正彦が幼稚園に執着しないように努力しました。

このようにしているうちに、正彦は兄が幼稚園に行けば、母親を一人占めできると考えるようになり、朝になると、「お母ちゃん、お兄ちゃんをちよつと幼稚園において来てね」とささ言うようになりました。そして正彦の嫉妬や反抗は全くしずまりました。

しかし一方、兄が幼稚園に行きたくないという傾向が少しみえ、「今日は休もうか」とか、「お母ちゃん、ずつとついでいてね」と言いだしましたので、登園の途中のような正彦のいない場所で、「正ちゃんはいささいけど、お兄ちゃんはいいいね」というように言つて、できるだけ喜んで登園させるようにしました。又正彦も幼稚園をあまりいやな所だと考えるようになると思ひましたので、月

(一六頁)

第六回日保連大会議案並協議題

◎ 大会議案

一 就学前の全幼児を幼稚園又は保育所に於て保育し得る様当局にその施策を強力に要望する件

◎ 分科会協議題

A 班 ○ 第一分科会（指導者 島根大学教授 近藤正樹）

A 班

1、幼児教育に於ける嫉のあり方

2、幼児の社会性を培う効果的な計画と指導はどのようにあるべきか（和歌山）

B 班

1、小学校教育に連関した保育カリキュラムは如何に組織されるべきか（和歌山）

C 班

1、幼児教育に於ける環境の問題について

（岐阜）

2、幼児指導要録の具体的取扱について

（京都）
（鹿児島）

○ 第二分科会（指導者 島根大学教授 寺本彦）

第一 部 会

1、文部省に幼稚園課設置の件（静岡） 2、教育委員会事務局に幼稚園の専任主事設置の件（鳥根） 3、児童福祉法を幼稚園へも適用されるの件（鳥根） 4、幼稚園教育の重要性を一般に認識せしめるの件（岐阜、福井） 5、幼稚園教諭養成機関充実の件（福井） 6、幼稚園教員の待遇向上策について（福井） 7、市町村立教員給与負担法中に「幼稚園教員」と明記するよう法令改正の件（福島） 8、私立幼稚園に対する国庫補助について（鹿児島、福井） 9、幼稚園増強に於ける経済的打開策如何並びに増設の計画とその状況について（三重） 10、上級免許状取得に要する経歴年数の五カ年を二カ年に短縮されたい（大阪私立）

第二 部 会

1、保育所保母養成機関を各府県に設置するの件（岡山） 2、児童措置費を平衡交付金の枠外に出されるよう当局へ要望するの件（岡山、鳥取） 3、最低基準改訂の件（鳥取） 4、保育所職員の共済組合を組織するの件（岡山）

くねついても眠りが浅く、夢が多く熟睡ができず、頭が重かつたり、頭痛がしたり、めまい・耳鳴り・どうきがする。食欲がなくなり・眼瞼(まぶた)や手指のさきがふるえるといった症状は、神経衰弱のときに見られる。このような症状のいくつかをもつている人もわたしたちの中に必らず発見される。

わたしたちは、そんな人々を理解と同情とをもつて見守つてあげなければならぬ。ところが、これらの心の病気がいかに本人を苦しめているか、わからないために、無頓着、無理解といった態度をわたしたちがとつていないだろうか。

このような先生の心の状態は、どこにも何らかの悪い影響を及ぼさないはずはないので、結核症と同じように精神障害についても、わたしたちはもつと注意もし研究もしよう。

「人が世の中及びお互い同士に対し

て最も効果的にまた最大の幸福をもつて、自分を調節し順応してゆくの精神の健康と定義しよう。……そして常に心を平静に保ち絶えず気を配つており、一方社会生活において他人に対して思いやりのある態度を押し、しかも自分は楽しい気持を持ち続けてゆくことができる、という能力……これが健康な精神である。と思う」といつた或る学者のことばは味うべきである。「他人に対し、思いやりのある態度で接しても、自分が苦しめてはつまらないし、自分は楽しくても他人の気持など」とんと構わないという態度では迷惑千万である。

幼稚園の先生方は、園児のために、身体的にも精神的にも、また社会的にも健康であるよういつも努めていたできた。

(東大教授醫學博士)

(29頁より)

に二回ある参観日には必ず連れて行くようにしましたが、そのときも兄は兄で、自分が遊戯ができるのが得意そうであり、弟は又弟で、母親と一緒にいられるのが得意そうであり、別に幼稚園に入りたそんな態度も示しません。

そして二人とも、別々の場所で母親を独占できるという喜びを持つようになり、正彦は嫉妬も示さず、乱暴も妨かなくなりました。

以上のように、母親は姑媳の手段ではあつたが、一応立派に問題を解決している。全く「親」という者は知慧の出るものだな」という感じがし、感心させられる。しかし、このやり方には無理があるので、今後どのように導くか、その指導と経過については極めて興味が残っている。

(筆者 愛育研究所教授相談員)